

第二十九回校内レガッタ 繋ぐ絆のキャッチ・ロー

十月十九日、校内レガッタが二年ぶりに開催された。今回で二十九回目を数える校内レガッタだが、過去には一度危険性があるという理由で中止になったことがある。また、二〇一八年の福井国体、昨年のコロナウイルスでも中止となった。今年も町内レガッタが中止となり、開催が危ぶまれたが、「美方高校生なら一度は久々子湖でボートの楽しさを味わってほしい」という先生方の思いと、美浜町の協力により、開催が実現した。日本でも珍しいこの行事がこれからも続いてほしい。

総合の部

一位から三位を二年生が独占し、上級生の意地を見せた。優勝した二二の寺井愛翔さんは「ホームのみんなが互いのクルーを応援していてとても楽しい雰囲気だった。全てのクルーが平均的に勝ち残れたことで優勝できた。担任の先生、精一杯応援してくれてありがとうございました」と喜びを表した。

男子の部

二一三Bが見事優勝を果たした。レース直後に松井大輔さんは「ただひたすらキャッチ・ローの掛け声のものと漕いだ。超気持ちいい。なんも言えねえ。最高で頭が真っ白になった。城宮先生にトロフィーを見せてあげたい」と顔をほてらせた。

女子の部

接戦のレース、中盤で前に躍り出た二二Aが優勝を手にした。玉井凜さんと柄本莉奈さんは「決勝では二一四と接って序盤息が合わなかったが声を出して団結して漕ぎ切ることができた。ゴー



総合優勝した二年二ホーム

ミックスの部

一年生では唯一、二一Bが二位に二十三秒の差をつけ断トツで優勝した。田中美優さんは「きつかった」ではなく「楽しく」漕ぎ切れて良かった。優勝の景色は最高だった。練習の時、始めは「落ちなければいいな」と



優勝のガッツポーズ

ルした時は嬉しすぎて両手を挙げて喜んだ。ボート部のみなさん、たくさん教えてください。サポーターしてくださる本当にありがとうございます」と嬉しそうに語った。

エルゴの部

【男子個人】優勝は、二一高田響さん。野球部で鍛えられた圧倒的なパワーと速さを発揮した。「みんなの応援が本当に力になった。



チーム一丸の応援

最後の方は心が折れかけたが頑張れてよかった」と喜んでた。【女子個人】制したのは二一甲斐希凜さん。元ボート部の力強い漕ぎで優勝した。「水が流れるごとく漕ぐことをテーマにした。期待に応えようと、辛かったけど負けたくなくて頑張った」と語った。【男子団体】二一三が二位に三十秒以上の差をつけて圧倒的に勝った。小西鷲さんは「腕が悲鳴を上げたが勝って嬉しい。勝利の秘訣は野球部を多く入れて速く漕いでもらうこと」と笑顔で語った。【女子団体】優勝は二一四。みんなが漕ぎ手の周りにつき熱い声援を送った。上田佑季奈さんは「すぐ引き始められるように、引き継ぎを協力した。始まる前に円陣を組んだお陰で力をもらった」と強いホーム愛を感じさせた。

校内レガッタを振り返って

清水先生は次のように振り返る。「今回開催できたのは美浜町の大きな協力があってから。そして校長先生をはじめ先生方の『生徒にレガッタを体験させてあげたい』『ボートの団結力を上げたい』という思いがあったから。天気に恵まれコンディションが良く、いい

ボート日和になった。生徒たちは、練習の時よりも上達していて、決勝はともレベルが高かった」と満足げな表情を見せた。二一三の松井くんと二一の橋詰さんをスカウトしたのと、ボート部顧問の本音も。また「いつもは選手としての立場の部員たちが、校内レガッタでは裏方を知れるいい機会。普段から感謝しながら学んで成長してほしい」と語った。



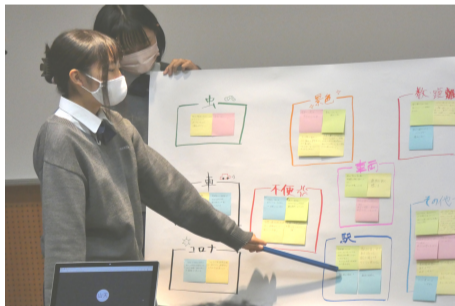
ボート部のサポート

編集後記

第百五十六号を読んで下さりありがとうございます。今回は二年ぶりの校内レガッタや弁当販売などの学校イベントが中心の記事にしました。取材や写真撮影に協力して下さい。皆さまありがとうございます。おかげで無事新聞を完成させることができました。今年の二学期は去年なかった行事が復活するなど去年より過ごしやすくなった印象がありますね。これからもよろしくお願ひします。

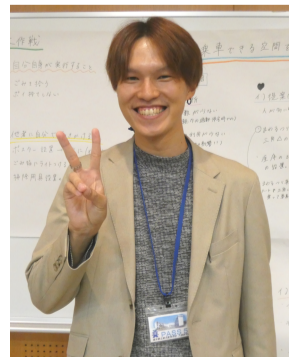
嶺南高校生がアイデア考案 小浜線活性化ワークショップ

十月二十六日、十一月九日に、福井県嶺南振興局主催の小浜線活性化ワークショップが美方高校で行われた。参加者は生徒会の十六人、小浜線の職員、舞鶴高専の生徒(リモート)。同ワークショップは沿線五校(美方、



小浜線のイメージを共有する様子

教賀、若狭、若狭東、教賀工)でも行われた。一回目は小浜線に対するイメージをグループごとに共有した。また、利用者を増やすために「きれいな景色をより楽しめるように車内をきれいにする」「街灯を新しく設置する」などのアイデアを出し合った。二回目は一回目の内容をふまえて、いいイメージをさらに伸ばす方法や、悪いイメージを改善する具体策を考えた。まとめとして利用者増加につながるキャッチフレーズを考案した。「ゆつたりバス旅 電車旅」「小浜線クリーン大作戦」など、高校生ならではの視点で様々なキャッチフレーズが出来上がった。今後はこのワークショップの様子やキャッチフレーズをもとに教



「あいとら」の下原裕二さん

賀市の三人組ユーザー「あいとら」さんが動画を作成し、SNSで発信する。参加した生徒は「とても楽しかったし、すごく貴重な経験ができたと思う。小浜線のいいところや悪いところの再確認ができた」と振り返った。小浜線の利用者の多くは学生が占める。美方高校生は約七割が通学で利用しているが、十月からの減便に伴い不便を憂う声もある。小浜線活性化のため自分ができることを再度考えてみてはどうだろうか。